

【國立台灣大學文學院 101 年跨國界的文化傳釋計畫】

學術交流演講 (三)

〔第一場次〕

日本古典文学研究の一潮流

—方丈記 800 年から考える—

〔第二場次〕

源氏物語と伝

—最新の研究成果から—

授課老師：荒木浩 教授（日本國際文化研究中心）

授課時間：2012年11月29日（四）

第一場次： 10：20～12：00

第二場次： 13：20～15：10

授課地點：校史館 108 教室

主辦單位：台灣大學日本語文學系

荒木浩 教授

【学歴】

- 1982年3月 京都大学文学部文学科国語学国文学専攻卒業
1984年3月 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻修士課程修了
1986年9月 京都大学大学院文学研究科国語学国文学専攻博士後期課程中退

【職歴】

- 1986年10月 愛知県立女子短期大学講師兼愛知県立大学講師
1990年4月 愛知県立女子短期大学助教授兼愛知県立大学助教授
1992年4月 大阪大学教養部助教授
1994年4月 大阪大学文学部助教授
1997年4月 国文学研究資料館研究情報部併任助教授（1998年3月まで）
1999年4月 大阪大学大学院文学研究科助教授
1999年9月 コロンビア大学客員研究員（1999年10月まで）
2006年4月 大阪大学大学院文学研究科教授
2007年8月 ジャワハルラル・ネルー大学客員教授（2007年10月まで）
2010年4月 国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授

【単著】

- ・『日本文学 二重の顔 〈成る〉 ことの詩学へ』（350頁、大阪大学出版会、2007年4月）
- ・『説話集の構想と意匠 今昔物語集の成立と前後』（勉誠出版、総758頁、2012年4月）

【共著】

- ・新日本古典文学大系41『古事談 続古事談』（川端善明氏と共著・校注他）（岩波書店・1014頁、2005年11月18日）
- ・『鴨長明とその時代 方丈記800年記念 図録』（国文学研究資料館、2012年5月）

【論文】

- ・「『方丈記』の文体と思想—その結構をめぐって—」（『文学 隔月刊 《特集》 方丈記800年』第13巻・2号、3、4月号、2012年）pp.61-76
- ・「〈非在〉する仏伝—光源氏物語の構造」（谷知子・田渕句美子編著『平安文学をいかに読み直すか』笠間書院、2012年10月）、pp.248-281
（以上、近年の主要業績のみを掲載）

【要旨】

第1講 日本古典文学研究の一潮流—方丈記 800 年から考える—

日本だけの現象ではないが、一般に、若年層を中心に、古典文学離れが嘆かれて久しい。ところが、本年、2012年だけは、きわめて異例なことに、古典文学が大きく脚光を浴びている。8月には、11月1日をもって、「古典の日」と制定する法案も成立した。この現象の起点は、2008年の『源氏物語』千年紀であるが、今年のムーブメントについては、日本最古の古典文学である『古事記』成立から1300年というメモリアルイヤーであるとともに、建暦二年、西暦1212年の3月末に鴨長明が『方丈記』を擱筆してから、800年という区切りの年であることが、直接的な理由である。

『方丈記』には、五大災厄と呼ばれる五つの大災害（安元の大火、辻風、都遷り、養和の飢饉、元暦の大地震）を直叙し、日本初の災害文学という呼称を冠されることもあるが、その災害描写の様子が、昨年3月11日に東日本を襲った大震災と呼応して、新聞やテレビなど、マスメディアにまでこの作品が繰り返し引用され、特集が生まれ、さまざまな行事が行われ、おびただしい関連の出版物が刊行される、という事態になったのである。

この講義では、この『方丈記』に焦点を当て、中世文学の精髓としてのこの作品を読み解くとともに、昨年から今年にかけての〈古典ブーム〉あるいは〈方丈記現象〉にも触れながら、古典文学作品にとっての現代性とは何か、という問題も併せて考えたいと思っている。

第2講 源氏物語と仏伝—最新の研究成果から—

近時、笠間書院から、『平安文学をいかに読み直すか』という論集が出版された（2012年10月末）。執筆者はおもに中世文学を対象とする中堅から若手の研究者である。中世の和歌を専門的に研究している田淵句美子と谷知子の編集で、久保木秀夫、佐々木孝浩といった書誌学者、渡邊裕美子、中川博夫、渡辺泰明といった和歌文学研究者、加藤昌嘉といった物語研究者、そして、説話や物語、あるいは仏教文学を研究している荒木である。対象とする作品は、いわゆる「平安文学」で、『伊勢物語』、『竹取物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『枕草子』、和泉式部の和歌、そして『源氏物語』である。

同書の序文に書かれているように、このような企画がなされた前提には、平安文学という、長い読解と研究の歴史を持つ、日本古典文学の代表的作品群の分析が、方法的に硬直しているのではないか、という反省がある。そうした状況を打破するために、あえて中世の韻文研究者を中心に、平安文学の散文を中心に再読を試みる、という意欲的な著述なのである。荒木は同書に「〈非在〉する仏伝—光源氏物語の構造」という論文を寄稿した。そこでは、『源氏物語』における予言の構造に注目し、これまでやや形骸的な史的にとどまっていた仏伝（釈迦の伝記）との比較をあらためて詳細に行い、従来とは全く異なる類似性と作品構造を発見したのである。

この講義では、この論集の意義について紹介しつつ、その一篇として書かれた、荒木の『源氏物語』論を披瀝しつつ、日本の「平安文学」研究の現在についても、批判的な考察を試みたいと考えている。